



SIGNIS JAPAN ニュースレター

タリタ・クム！ 起きなさい！

発行：SIGNIS JAPAN（カトリックメディア協議会）

代表：土屋 至

発行所：〒107-0052 東京都港区赤坂 8-12-42

聖パウロ女子修道会内

TEL 03-3479-3941 E-mail: info@signis-japan.org

<https://signis-japan.org/>

聖母被昇天祭をお祝いいたします。

猛暑の中、7月23日から東京五輪2020が開かれ、たくさんの競技が放映されました。アスリートたちが今までの練習の成果を出し、熱戦を繰り広げ、わたしたちに感動を与えてくれました。今まで見たこともない新しい競技に10代の若い人々が挑戦している姿を頼もしく思い、男女混合の試合が多くなったことにも時代を感じました。また、競技とは別に、ネットを通じての勝者への誹謗中傷の激しさを知り、また反対に同じネットをとおして、選手村で過ごしたアスリートから、選手村の快適さや景色の美しさ、スタッフやボランティアへの感謝が世界に発信されたことも知りました。1981年2月に聖ヨハネ・パウロⅡ世教皇が広島から世界にむけて発信した平和アピールの中で訴えた「神よ、わたしの声を聞いてください。わたしは、主がすべての人間の心の中に、平和の知恵と正義の力と兄弟愛の喜びを注いでくださるよう、祈ります」との祈りに合わせて、オリンピック、パラリンピックをとおして、世界の人々と“平和”の輪を結びたいと思います。



『福音家族で一緒ごはん』 晴佐久昌英神父（東京教区司祭）

カトリック東京大司教区災害対応チーム主催オンライン パネルディスカッション「コロナ禍の今、教会（わたしたち）のミッション」第二回（2021年2月6日）にて、晴佐久神父が講演されました。この動画を東京教区のご了解をいただき、SIGNIS Asia TV Desk Virtual Conference（2021年5月）の中で、シグニスジャパンからのプレゼンテーションとして展開いたしました。今回改めて文字起こししてお届けすることにしました。★動画は、[東京教区災害対応チームFB](#)からご覧いただけます。

正直に今、やっていることについてご紹介していきたいと思います。私は、個人的にはとてもぶっちゃけ冷たい人間だと自分のこと思っていて、でもキリスト者ですし、司祭ですし、何かやっぱり困っている人を助けてあげたいな、という気持ちはあるんだけどなかなかうまくいかない、実行できない、そういう司祭生活を歩んできて、そんな中でこうすればいいんだというようなひとつのヒントに至りました。



それは、『家族になってしまえばいいんだ』という気づきです。道でおじさんが座り込んでいるとき、もしそれが自分の父親だったら「どうしたの親父」と声をかけるわけです。知らない人なら関わらず通り過ぎていく。本当の親父ではないまでも、自分の親父のように感じることで最高じゃないですか。それにはどうしたらいいんだろうと。その一番の鍵が・・・普段せめて月に一度は一緒にご飯を食べる。一緒にご飯を食べ続けていると、だんだん家族になっていく。それを私は『福音家族』と呼んで、いろんな実行をしてみたりしました。そうすると「さあ、やらなきゃ」ではなく、家族が困っているときに当たり前のように助け合うということが少しずつ実現するんですね。今流行りの公助、共助、自助でいうなら、公助はお国ですね。共助はNPO法人とか地域社会とかあるんでしょう。自助はなかなかできないときに、教会活動のような共助とそして自助の間あたりに、言うなれば互助というべき家族作りをしておけば、いざ災害というときにお互いに当然のように助け合う。そのある意味、災害の前に準備しておくというそういう側面もあると思います。福音家族作りは、そういうことです。一言で言うと、血縁を超えて必ず助けあう家族を、一緒にご飯を食べ続けることで作っていくプロセス。その全体を『福音家族運動』ということでもないんだけどやっけていて、実を言うと今そんな家族を24作ってお世話しているんですよ。

たとえば、一番最初に作ったのが心の病で苦しんでいる青年たちの家族。育児支援のためにお母さんたちを集めた家族、近所の人で信者は誰もいない。ベトナム人技能実習生と毎月ご飯を食べる『サンタ会』。中には『ウズベク家族』なんかもある。近所のコンビニで働いているウズベキスタン人たちに青年たちが声をかけて、集まってもらって毎月一緒にご飯を食べる。全員イスラム教徒ですからハラール食。おいしいんですよ。羊肉をこう鉄串にさして、教会の庭でバーベキューみたいに焼いて食べたりするんですけど。そういう家族作り。必ず家族が集まり、飯の始まるの時には「これはもう家族なんだから、何か困ったことがあれば必ず助けあう、そういう仲間として食べようね」って、これは必ず言います。そして、それを毎月重ねていくうちに、多いところは月2回、3回のときも。段々やっぱり何でしょう、情が移るといって、家族になるんですよ。オタクたちの『秋葉だファミリア』とか、無人島へ一緒に行く仲間たちの『無人島家族』も。あらゆる家族を作っていこうとしていて、今24ですかね。ということは月に1度でも私は必ず全部出ていますから、月に24日は一緒ごはんをしている。『一緒ごはん』がキーワードなんですよ。この3年くらい特に増えてきたので、私太っちゃったんですよ、一時期。あまりご飯がよくて。でもコロナ時代に、その一緒ごはんができなくなったら、なんとコロナ痩せをしました。何キロか減っちゃいました。ということで一緒にご飯を食べていたのに、それが食べられなくなるのは、『福音家族』にとっては、とても残念なことですが、逆に言うと、そんなときでも普段一緒にご飯を食べていた仲間とは連絡を取り合いますし、Zoomで飲み会をしたり、本当に困っていたら会いにいきますし、そういう繋がりが先にあるわけなんですよ。先にそういう家族を作っておくと災害のときに本当に助け合うこともできる。そういう意味ではこのコロナが開けたら、福音家族作りをもっともっとやっけていきますし、皆さんも是非お試しください。

ださいと言いたい。簡単です。仲間で呼びかけあって、教会でもいい、自宅でもいい、ファミレスでもいい、ともかく月に一度集まって困っていることを話し合ったり、助け合おうね、家族になろうね、とチャレンジする。考えてみたらイエス様がやっていたことですよね。イエス様が血縁のマリア様が会いにきたときに「私の母、私の兄弟とは、ここにいるあなたたちだ」って。そこに集まって一緒に飯を食っていたんでしょ。貧しい人、障害がある人、病んでいる人、罪人、排除された人がイエスの周りに集まってきて、それをイエスは『家族だ』って言ったんですね。これがキリスト教の始まりです。そういうことを小教区でも、いちキリスト者でも、小さな集いでもやっていけばそこが本物の教会です。逆に言えば、看板を出して十字架立てても、誰も受け入れなければ果たしてそこは教会か？そこは教皇フランシスコが強調しているところですよ。

ちなみに、食べられない、と言いましたが、実際にはアクリル板でブースのようなものを作って、そこで食べたりしました。緊急事態宣言になってからはそれも止めていて、今は寂しい限り。これがそのアクリル板です。90×90cmです。でかいでしょ？全部で36枚くらい用意してあって、これを紐で天井からかけて、ひとりあたり囲うわけだから3枚くらい使って、向かい合う人と2人で5枚。この中でご飯を食べるようにしています。まあ、福音家族もちよとした意地ですね。もちろんマスクをして、食べるときだけ外して。そこまでして一緒にご飯を食べたいね、という仲になっていれば、そういうことも可能です。普段からどれだけ福音家族に慣れているかということです。そういう準備をしておけば、いざというとき、災害時に助け合うことができると思います。

実際一番、最近のケースで言うと、一昨日ですが、去年引きこもりの青年たちの福音家族があり、その福音家族でGO TO使ってちょっとした合宿したんですね。そこに参加にしていたひとりが、事情があって住むところを失ってしまった。どうしようと、また別の福音家族のB君に相談したら、B君がまた別の加わっている福音家族C君に相談して、A君とC君は知らないんですよ。C君の家に転がり込んで、一昨日からそこで暮らしている。これなんかは実際の肉親の家族はちゃんとした家族がいなくて、かと言って共助とか公助までたどり着いたりつけないでいる。そういう人たちは結構多い。そういう人が福音家族のようなセーフティネットがあれば、そのネットワークでどこかでとりあえず暮らせる。これは一昨日のことですが、そういうことが結構あります。

中でも、今日紹介したい一つの家族は、ホームレスの福音家族です。浅草、上野は割と多いので、以前からそういうことチョコチョコやろうとしていたんですけど、福音家族としてホームレスの家族を作ろうと、『うぐいす食堂』として心ある仲間たちと、それは教会の人もいればそうでない人もいます。呼びかけて友だち呼んで、またその友だち呼んで、集まってきた仲間たちと一緒に家族作りをしています。これは『炊き出し』ではない、ここは言わしてもらいたい、炊き出しではなく、一緒に座ってご飯を食べる。家族だから。しかも普段からあまりおいしいものを食べていないだろうから、月に一度はごちそうを食べようねと。なかなかおいしいフルコースっぽいものを食べています。最後のデザート、コーヒーに至るまで。これがコロナ禍で一緒ごはんができなくなりましたので、今はお弁当配布になっていますけれども。これも2段重ねの手作りのかなりおいしいお弁当にしているんですが。12月の様子の写真がありますので見ていただきたいと思います。（※写真の説明）このうぐいす食堂は、寄付とか食材の差し入れとかでやっています。教会で作っています。クリスマスだったので お弁当配布をするだけでなく、クリスマスプレゼントを配布。靴下とかパジャマを配っています。参加者に「プレゼント何が良い？」と聞いたら、「靴下かパジャマ」と言った方が多かった。待っている間、外でコーヒーサービス。普段は中で食べるんですけど。いろいろな衣類とか、生活用品とかタオルとかも配っています。知り合いの整体師に頼んで、無料で整体もしております。そういう要望があったので。素敵な音楽もかかっています。手作りのケーキを配って・・・大体今50人、これ以上増やさないように。増えたらもう対応できないので。招待券を作って『次は1月30日15時から配布ですよ』と裏に地図まで書いてあります。この人たち、毎月集まってきたりするので、こちらも顔見知りなのです。なので「困ったときには教会に来てね」って言ってますし、この前の台風の時、台東区の避難所にはホームレスが入れなかったという事件もあったので、あのとき、吹き飛ばされそうになって、歩道で四つん這いになったという方もいた。「教会に来てくださいね」と言っています。そういう方たちが教会にきて、荷物を預かったりもしております。



年末年始、寒いときに、私、たまたまちょっと前に会った3人を招待したんですよ。「年末年始、めちゃめちゃ寒いそうだから教会で過ごしませんか」と。すごく喜んで、一緒に年越しをしました。頼んで作ってもらった年越しそばを食べて、一緒に紅白を見て、カウントダウンをして、乾杯して、あったかいところで休んでいただいて、翌朝はお雑煮を作って出して、本当に喜んでくれました。その方がこう言ってたんですよ。「自分たちはお金とか食べ物とか必要だけど、本当に求めているのはそれじゃない。心を求めているんだ。だから、誘われてすごくうれしかった。そんな経験がないから、一緒に紅白見ましょと誘われて本当に嬉しかった」と。こちらから見れば3年も毎月一緒にご飯を食べている家族に近くなっている人が、この寒空を過ごすのを放っておけないよ、美談でもなんでもなく、そう感じてお招きしたんです。それが福音家族の心なんじゃないかなと。これからもこの福音家族みたいな、一緒ご飯での家族作りを、教会が音頭とって中心になっていっぱい作っていったらいいと思います。

他所がどうかはともかく、自分はそのように工夫してコロナの時代、この後のことを色々思い巡らして、今後はどんな家族を始めようかと考えているところです。場違いだったかもしれませんが、非常に個人的な家族紹介になりました。ありがとうございました。

オンライン講座 花盛り

最近『カトリック新聞』最終面の告知欄では、各種講演会、セミナー、研修会など、さまざまな企画が「zoomによるオンライン開催」と銘打たれていることに気づきます。

新型コロナウイルス感染拡大防止策として、昨年 4、5 月から徐々に導入されるようになった大学等でのオンライン授業実施。その他リモートワーク（テレワーク）の中での会議でも常用されるようになってきました。目的により効能の違いはありますが、ここでは、上記講座等のオンライン実施の有効性と可能性をおもに見たいと思います。

それらのオンライン開催の最大の利点は、いうまでも地域の隔たりを超えることができることでしょう。典礼であれ、聖書であれ、全国標準のものを土台としている教会では、とくに、標準的な事柄や共通の関心事に即した知識内容、思想内容を視聴し取得するために、わざわざ交通費をかけて集わなくてもよくなりました。なんでも東京、なんでも司教座都市や大学で、というわけではなくなったわけです。だれもが（インターネット環境と十分な端末があれば）、自室から価値ある内容に触れられる、多少はそれなりの交流もできる……リアルな集会との違いは長短さまざまにあっても、立派に新しい学び方のツールとなりつつあります。

これは、信仰、教会、世界のあり方を問いかける生涯学習の幅を格段に広げつつあります。告知を見て多様なテーマから思い思いに選んで気軽に参加できる幅が広がったという意味で、自分の生涯学習、生涯思索、生涯研究を多様に企画できるようになっているのです。主催者側にも効能があります。会場探し、会場費を考えなくても、多少のライセンス料で簡便に講座等を主催できます。もちろん、人間ですからリアル集会への渴望が生まれてくるでしょう。それは、自然な対面の交流の大切さ、心身・言語を超えた“霊”の働きを実感することにもつながるでしょう。その方向での役割もしっかりとオンラインにはあります。まだまだ忍耐の続く状況、その可能性に、世界と教会と自身の将来への希望を託しつつ、さまざまな企画と設定に挑戦していったらいいかでしょうか。

最後に、筆者主催の講座をご案内させていただきます。
：「オンライン キリスト教典礼講座 by 石井祥裕」
2020年7月31日第1回開催（全7回）。以後、毎月
最終土曜日（12月除く）。参加費 7000 円。録画内容の
オンマンド受講も可能で、途中参加も歓迎します。
詳細はウェブマガジン「AMOR 陽だまりの丘」
<http://webmagazin-amor.jp/> の告知・イベント欄を
参照。

(石井祥裕：SIGNIS JAPAN インターネットチーム／
「AMOR 陽だまりの丘」編集長)



映画『祈り-幻に長崎を想う刻（とき）-』

この夏、映画『祈りー幻に長崎を想う刻ー』（松村克弥 監督/2020年/日本/110分）が公開される。この映画は、『マリアの首』（原作戯曲：田中千禾夫）が映画化されたもので、原爆で被爆した浦上天守堂にあったマリア像を題材にした物語である。

舞台は戦後 12 年目。まだ瓦礫のまま残された浦上天守堂の中で一心に祈る女性、鹿（しか）の姿があった。彼女には、天守堂に散らばった聖母マリアの像を修復するという信仰からくる悲願があった。その計画も残すところ首をつけることによって全てが終わろうとしていた。「被爆のマリア」の修復に反対していた長崎市に対して鹿は、「広島は、原爆ドームを残すのに、なんで長崎はマリア様ば保存してやれんと？何もかもきれいさっぱり無くしてしもうて、平和な街にするとですか？それじゃ、まるで観光名所たい。それじゃ、被爆した長崎市民の本当の魂に触れることはなか」と怒りを露わにする。



©2021K ムーブ

鹿自身も被爆によって首にケロイド状の傷を負っていたが、「自分のこの傷は亡くなった7万人の長崎市民の証しだ」という。

原爆によって多くの死者を出し、戦後76年経った現在も原爆症に苦しみ、また、被爆2世、3世も放射能が原因で病気の苦しみと不安を抱いて生きている。

平和に暮らしている今の私たちの周りには、まだまだ、原爆の傷跡に苦しむ多くの人がいることを改めて思い起こすとともに本当の平和を考えさせる映画である。

(井手口 満:SIGNIS JAPAN

映画チーム/聖パウロ修道会)

池谷薫監督 ドキュメンタリー塾 参加体験

池谷薫監督が、自身の監督・制作ドキュメンタリー作品を解説する企画、「池谷薫ドキュメンタリー塾」が、今年1月から7月まで5回にわたりオンラインで開催されました。(神戸・元町映画館主催)

★現在はアーカイブ販売を視聴することができます。

末尾をご参照ください。

参加者はインターネットで申し込みし、上映URLを受け取って映画を視聴、その後「塾」にオンラインで参加します。池谷監督は会場からZoomを使って講演されました。監督のFacebookに「精魂込めてつくった作品を、これでもかというぐらいに語り尽くした。」とあるように、映画の企画の経緯、撮影方法、技術的なことなど、どのようにひとつの映画として形作っていくかを、クリップを見せながら、丁寧に、時には多少脱線しながら、楽しく熱く、そして真剣に、素人にもわかるように、語ってくださいました。

オンラインであることを忘れるほどの近さで、監督の映画に対する思いが伝わり、作品を通して描かれる「人間の尊厳」が観る側に問いかけられる、臨場感あふれる「ドキュメンタリー塾」でした。

作品は全部で5本。中国文革期の下放青年の娘を描いた『延安の娘』、同じく中国の山西省日本軍残留問題に取材した『蟻の兵隊』。この映画をとおして残留日本軍事件が広く知られることになったという、貴重なドキュメンタリーです。『ちづる』は、池谷監督の立教大学での教え子赤崎正和氏が自閉症の妹、ちづるさんに寄り添って撮った作品で、監督がプロデュースしています。次に登場したのが、第38回日本カトリック映画賞授賞作品『先祖になる』です。陸前高田の木こり、佐藤直志さんが、息子さんを東日本大震災の津波で失いながら、もう一度海の見える場所に自分の手で切った木で家を建てる、心に残る作品でした。最終回は、池谷監督がどうしても観てほしいという『ルンタ』。「チベットを撮る、人間の尊厳とは何か」という強いメッセージを受け取りました。それぞれに持ち味あり、美しい映像、音もこれらの映画の大きな魅力です。

この夏、是非アーカイブでお楽しみください！

(泉 塩子:SIGNIS JAPAN)

【販売期間】 7/16(金)～8/28(土)正午

【視聴期間】 各作品本編: 8/13(金)～8/29(日)

各作品解説トーク: 8/13(金)～9/12(日)

<https://www.facebook.com/docujuku>



賛助会員募集

わたしたちSIGNIS JAPANの活動をサポートして下さる賛助会員を募集しています。

会員の方には、ニュースレター「タリタ・クム！」(年3回発行)をメールまたは郵便にてお届けする他、賛助会員と共に捧げる感謝のミサを東京地区で行っています。詳細は賛助会員の皆さまにご連絡させていただきます。

年会費 3,000 円。ご入会いただける方は、氏名、住所、連絡先を下記までお知らせ下さい。

どうぞよろしくお願いいたします！

〒107-0052 東京都港区赤坂8-12-42

聖パウロ女子修道会内 SIGNIS JAPAN / info@signis-japan.org

会費およびご寄付は、下記へ振込みをお願いいたします。

郵便振替 口座番号 00100-0-594547 / 口座名称 SIGNIS JAPAN 代表者 土屋 至